

# 草の芽句会たより

NO,92  
28,4,7

川に向く寺の狭間や月朧  
石垣に枝垂れし花の映ろえる  
文子

石垣に雪崩る桜も雨の中  
昨夜の雨落花の道のできてをり  
範子

花ふぶき受けつつ札所めぐりかな  
雨音の静かになりぬ花の城  
純子

雨に散る桜をふみて城歩く  
基準木の一枝にわずか花咲ける  
節子

城濠の花びらすじに浮いてをり  
花の散る人出少し雨の城  
貞子

花筵二人座れる広さかな  
花屑を靴にまとひて城の径  
禮子

哀しみも憂いも無きやチューリップ  
お札所の小径を選び花を見る  
貞

花ふぶき浴びて巡りしミニ札所  
落花しきり遍路は笠を傾けて  
剋子

出席者 大黒 吉崎 森 氏家 河原 馬場  
投句者 真鍋 小山

夕べからの雨にお城を訪れる人も少なく静かで、満開の桜をゆつくり楽しむ事が出来ました。これも雨のお陰かなーと納得。お部屋に帰ると楽しみのお弁当。巻ずし、筍の天ぷら、玉子焼と舌づつみしながらお喋りが尽きません。これからも無理をせず、俳句を続けたいものです。

(禮子 記)

